

# 別子鉱山史の留意点－追加1

令和3年7月11日 坪井利一郎

白井智子の「別子銅山古文書に見る明治初期の生野銀山と別子銅山の相互関係－お雇い外国人コワニエと広瀬幸平の交流を通して」(仏蘭西学研究39号 2013年)を読む。その中に何点か新事実が掲載されていた。

## 白水丸とルイ・ラロック

広瀬幸平の「半世物語」には、ルイ・ラロックが和船を嫌ったので汽船を購入したと記述しているが、白水丸を購入したのはコワニエに別子銅山を視察に来てもらうためであった。広瀬は、フランス人技師のルイ・ラロックとコワニエを記憶間違いしたままで書いた。

コワニエの別子銅山視察は多忙のために延び延びになっていたが、ついに実現する。

明治5年 9月 5日 工部省へコワニエの別子銅山への派遣視察を懇請する。

明治5年 10月 8日 聴許となる。

明治5年 11月 イギリスの汽船を購入して白水丸と命名する。

明治6年 1月 27日 広瀬は生野に出張。コワニエに直接要請のため。

明治6年 6月 3日 生野出発

住友友親・広瀬幸平が白水丸で飾磨港で迎えに来る。

6月 4日 新居浜港に着く

6月 13日 新居浜港から飾磨港、姫路から生野に帰山する。

## 増田芳蔵のフランス留学

別子鉱山目論見書の実施に当たって、塩野門之助と増田芳蔵をフランスに留学させた。塩野はルイ・ラロックの通訳をしたからフランス語ができるからであった。

広瀬が明治元年9月～明治2年1月まで生野銀山に出司した後に、岡田梅蔵と増田芳蔵を生野鉱山学校に送り、コワニエから鉱山学とフランス語を学ばせる。増田はフランスを学んでいたからフランスへの留学生に選ばれた。

## 火薬のわが国での初使用

広瀬は生野銀山出司中にコワニエから火薬採掘法を学んだ。別子銅山に帰山し、生野にも負けじと近代化したいとの強い意志から第一通洞開削で火薬を使用したのは、厳密に云うと「我が国の民間鉱山で最初に火薬を使用した」となる。コワニエは生野銀山で日本で初めて火薬を使用している。広瀬は明治4年4月に再び生野銀山への出司が命令され、6月2日に着任する。8月頃になるとコワニエと懇意になる。コワニエの別子視察へと展開。

## 別子鉱山史の留意点—追加2

令和3年9月1日 坪井利一郎

### 鬼殺し

小足谷醸造所で造られた酒の銘柄は「イゲタ正宗」、別名「鬼殺し」。昭和44年刊行の「旧別子案内」に「イゲタ正宗」と出ていて、以後この記述が続く。明治43年刊行の「雑誌・遠鳴30号」では、新井琴次郎が「井桁正宗」と記述している。（井桁はw i g e t aなので、カタカナ表記ではキゲタ。キゲタ正宗となる。）新井琴次郎の戦前の遺稿を子息が平成19年に本にした「紙碑」には、「鬼殺し」が出て来る。昭和16年刊行の別子開坑二百五十年史話では「銅山正宗」と記述している。

別名の「鬼殺し」は、この酒を飲むと鬼の様に気の荒い坑夫も酔いつぶれておとなしくなるところから、誰言うとなく「鬼殺し」と言われてきたと説明される。現代教養文庫「日本を知る小辞典3衣食住」（社会思想社）に、「昔は辛口の酒が喜ばれた。辛すぎて『鬼殺し』の異名がついたとは方々で聞く話だ。」とある。辛口の酒を言っていたと考えられる。

小足谷で吟醸酒を造る必要はなく、少しでも多く酒を造ろうとすると、米の精米度も低くなり、たんぱく質に起因するフーゼル油分が高くなって、飲むと頭にこたえた。

現在でも高山市や松本市に「鬼殺し」の銘柄の清酒が販売されている。

### 露頭線

別子開坑二百五十年史話に、「尾根を越えて昼なお暗い中を二三町南に下って露頭らしいものを見つけ」とある。これを元に尾根を南に少し下った箇所で見つけた話として色々書き綴られる。尾根に交差している露頭線の染色を南に下がると鉄のスクラップの散乱と見間違える露頭に出会う。そこを越えて大露頭の岩塊を見つけたとなると2番目になる。現地をよく見ていないから、登山道の横の大露頭の岩塊で話を作る。土佐街道も荒唐無稽に現況に合わずから現況認識がややこしくなる。

銅山越え—銅山峰—西山の稜線の登山道と露頭線は一枚岩で交差しているの、西条藩領内からも露頭線が天領に続いているのは一目瞭然である。尾根から南は昼なお暗い密林状と記述するが、銅山峰のツガザクラが80万年前の氷河期から生き延びて来ているので、尾根は灌木が生えてはいるがバッドレス状である。立川銅山から露頭線を辿って尾根まで来ると、更に続いているのは明白である。また、バッドレス状は、平野からも識別が付き、馬の雪形にも出るので山相からも知ることができていたはずである。

大和間符横の大露頭が登山道の傍らに露出しているので、視覚的に露頭発見譚にしている。西条藩・天領国境の露頭線を見ていても露頭と理解できないので、大露頭で書き始めている。大露頭での試掘でなく、後の歓喜間符の所での試掘は、2点調査を暗示している。

現在も大露頭にはヘビノネゴザの羊歯か生息している。金属探査の指標植物なのに、これに触れないのは、この方面の知識がなかったからであろう。

## 第一通洞南口前のコンクリート水路

東延斜坑から出た鉱石のズリは、第一通洞南口前の斜面に捨てられた。雨水が東延谷を流下するとズリ捨て場の下部を侵食して、ズリが岩石なだれとなって崩落するので、ズリ捨て場の上に、雨水でズリが流出しないように付け替え水路を設置した。水路の水は鉄缶橋の上流の岩斜面を滝として落下している。昭和30年代前半頃の建設である。(岩波写真文庫・銅山のP14下段の写真に、ズリ捨て場が写っている。)

## 南蛮吹き

住友寿済が堺の異国人に学んで銀抜き法を考案したとの伝えは、天正19年(1591)であった。生野の「銀山旧記」には、寛永9年(1632)に多田銀山から来た者が、「かたけ吹き」をするとある。かたけ吹き＝南蛮吹きで、銅の中に含まれている銀を分離精錬する一連の工程をさす。なお、「かたけ」は地銘か人名かも不明。

石見銀山は、博多の商人の神屋寿禎の「銀山旧記」によると大永6年(1526)に発見された。そして翌年に開発される。灰吹き法は発見7年後の天2年(1533)と伝えられている。

佐渡に灰吹き法が導入されたのは天正11年(1542)で、鶴子銀山が成立する。慶長9年(1604)に設置され佐渡奉行所を復元すると、奉行所の床下から貴鉛が発掘されている。

日本海の灰吹き法の伝播は、博多→石見→佐渡が考えられる。

大阪エリアの灰吹き法の南蛮絞りは、堺→大坂の住友への延長線上に多田→生野があるのか。堺を起点としての別ルートなのか。5年～15年の差は何にを物語るのか、注目点である。

### 生野の銀山旧記の注

かたけ吹き：慶長年間(1596～1614)に伝わった「南蛮吹き」によって、多田銀山は第二の盛期を迎えた。かたけ吹きは銀を含む粗銅から、南蛮吹き・南蛮絞りによって貴鉛を絞り出し、その後、灰吹きによって銀を取る一連の事。南蛮吹き法は、粗銅に含まれる銀を抽出するとともに、不純物であるヒ素やアンチモン等も取り除き銅品位を上げることができた。

## 背負子

別子山型の背負子は、荷を乗せる箇所は着脱式になっている。T字状に作り縄で結束して止めた。初期においては、木の幹と枝部を一体加工して作成していた。東平歴史資料館に再現した背負子が展示されている。

仲持ちは、立てって休む時に背負子下に頭部がT字状になった杖を入れて支えた。そのために背負子の下の横棒に切りこみを設け、杖の頭部を切りこみに入れていた。

石ヶ休み場では、石積みのベンチに腰掛けて、背負子の脚をベンチに乗せて休んだ。石見銀山には「もたれ石」があり、その石にもたれて背負子はもたれ石の上に乗せて休んだ。

## 別子

別子開坑二百五十年史話に、景行天皇の第12皇子の武国凝別命が、新居、宇摩、周桑郡を治め、その子孫の加禰古乃別君、龍古別君、意伊古別君が統治するとある。龍古別君は龍河神社の祭神、意伊古別君は新高神社の祭神として祀られ、尊い縁故から「ワケノコ」と呼ばれていたが、後に音読みして「ベッシ」となり、別子山村に名を留める。

武国凝別命は西条市の伊曾乃神社の祭神として祀られている。なお、景行天皇の古墳は奈良盆地を見下ろすように、桜井市の山野辺の道の傍らにある。

森博達「日本書紀の謎を解く」(中公新書)P61の埼玉稲利山古墳出土の鉄剣銘「獲加多支鹵 比埜 獲居 足尼」(ワカタケル ヒコ **ワケ** スクネ)で示すように「別」は尊称。

武国凝別命の末裔が多く西条市内・新居浜市内で確認できる。別子の苗裔が新居氏。

加禰古乃別君	野田	加禰=金属を示し鉾山に關係する	岡古墳の祭神
龍古別君	立川	龍河神社の祭神	
意伊古別君	生子	新居宮の祭神・種子命 <small>をいこのみこと</small>	(注)新高神社は新居宮+高知神社
川内乃別君	高知	高知神社の祭神で意伊古別君の子にあたる	
弥須古別君	大谷・戸屋鼻	野津子	(ネズコ→ノズコ)
波夜古別君	早川		
猿古別君	玉津小学校東	の猿子	

武国凝別命の

長男 水別命・三津別命

水別命の長男 十城別命は飯積神社の祭神の一つ

二男 津守王きみ・大笠別・小笠 下島山の笠木・笠地  
玉津の風間

三男 津守別命

※津は玉津の津か？

※岡古墳の祭かみとされる加尼古別命は武国凝別命の曾孫

## ヘルメットの走り

頭部を保護するヘルメットの走りは、帽子の上に薄い鉄板を前後に取りつけたものであった。やがて左右に広がって鉢型になったのが、ヘルメットである。別子銅山を取材した岩波写真文庫・銅山の写真に数多く写っている。

佐渡金銀山では、コヨリで作った円形物を頭上に置いて、ひもを顎で結んでいた。修験者の頭兎も頭上を保護するものであったが、後には額に下りてきた。

## 惣開製錬所の位置

日暮別邸西の展望台から惣開を見降ろして、御代島の左奥に四阪島を望む。住友化学の精製塔の右側、御代島西端をかすめて四阪島と展望台を結ぶ線上に見える、煉瓦造切妻の大きな建物2棟が、第一火力発電所の増設部の跡。この建物の東側に惣開製錬所があった。

## 別子鉦山史の留意点—追加3

令和3年11月14日 坪井利一郎

### 横たえた梯子をまたがない

雑誌「遠鳴」の「昔話」の中に出て来る。「買請米の安米が無くなった慶応2年、支配人広瀬宰は改革として米1斗を45銭に引き上げたことに反発した労働者は不平を起こして下山した。国道の中村まで行くと、村民が梯子を倒して道に横たえた。梯子を跨いで通るには訳は無いのだが、古来の風習で横たえた梯子をまたいで通るは作法に無いので、元来た国道を引き返した。」

- ①梯子をまたぐ姿勢は、梯子から転落している姿勢になるから。
- ②梯子は、神が昇り降りする神聖な用具だから。
- ③梅原猛「森の思想が人類を救う」(小学館)のP53に「柱は、そこを通過して神々や人間たちがゆききする神聖なもの。――伊勢神宮の御遷宮の初めは心の御柱の建造から始まります。諏訪神社には御柱の大祭があります。金沢の近森遺跡や能登半島の真脇遺跡のウッドサークル(環状列木)を見て、それらの意味が分かりました。」
- ④川添登「民と神の住まい」に、伊勢神宮の心の御柱は、床の下に立っている直径約30cm長さ約1.8mの檜の棒である。明治4年に新政府によって伊勢神宮の大改革がされる前には、諸行事で正殿の床下に神官が入って、心の御柱の前で祭儀が執り行われていた。日本書紀の崇神、垂仁の条にみえるヒモロギではないか。石を敷きつめたシキ、榊を指す説と持ち運びできる逗子説があるヒモロギは神の依り代である。ヤマトヒメがアマテラスを奉戴して五十鈴川のほとりの巖櫃いつかしのもとにまつ。巖櫃とは神聖な櫃の木である。心の御柱は、神社建築がなかった時代の神の依り代と思う。

柱 ハシラ 垂直 → エレベーター

橋 ハシ 水平 → 動く歩道

梯子 ハシコ 斜め → エスカレーター

ハシラ、ハシ、ハシゴ。ハシが共通部。柱は立木で天と地を結ぶ通路。天から木の先に降臨し、元から末に登り天に向かう。木を伐採して任意の場所に定める。木を倒して端と端に渡すと橋。木を立て掛けると梯子。

日本書紀には神々が柱を通じて天地をゆききしていたとある。古事記に出て来る天の浮橋も天地をゆきかう橋であった。京都の天の橋立は、昔には天に聳えて立っていたという。その橋立を通して神も人間も往来していたが、ある日神様が居眠りしていた間にドスンと橋が倒れて、今のように横たわっているとの神話が丹後風土記に記されている。

播磨国風土記に「石の橋あり。伝へていへらく、いにしえ上古の時、此の橋天に至り、八十人衆、のぼくだ上り下り往来ひき。故、八十橋といふ。」とある石の橋は石段のことである。橋はももとは梯子や階段と同じであった。和歌などに出てくる石橋は浅瀬に並べ

た飛石である。端と端に板を渡したものは打橋という仮橋である。万葉集に「川の上つ瀬に石橋渡し、下つ瀬に打橋渡す。」とある。ハシの古代日本語は橋であると同時に<sup>はし</sup>階であり、<sup>はし</sup>梯であった。キザハシ、キダハシが元で、キザは刻むのキザで、キダは<sup>きだ</sup>段である。一本の丸太に足がかりのための刻みを入れたものが原型である。

(上田篤「橋と日本人」岩波新書)

## 劇場

各劇場を比較すると、旧別子の回り舞台の直径は約6mか。

	縦横	床面積	周舞台の直径	収容人数
旧別子	14.5間×24間 43.7m×26.4m	350坪		1000人以上 (以前は2000人と言われていた)
	桁棟は10間×20間 18.2m 36.4m	200坪	3~3.5間 5.45~6.37m→約6m?	
東平	12間×18.5間 33.7m×21.8m	222坪	3.25間 5.9m	2042人
四阪島	11間×17間 20.0m×30.9m	187坪	3.5間 6.37m	1400人 長椅子席
			※1間=1.82m	

## 別子鉾山史の留意点—追加4

令和4年4月10日 坪井利一郎

### 船窪の峯

一宮神社の社記「神野郡の伝」に神野郡の四至が記されている。四至とは東西南北。

西は氷見の境塚より以東なり。

東は関の立石より西なり。

南は船窪峯より以北なり。

北は高井神島より以南の海面を限るなり。

西赤石山から西山にかけての吊り尾根が、船の底のように見えるところから船窪の峯と古代から呼ばれていたことを示す。銅が産出されるようになって銅山峰と呼ばれるようになる。銅山越え南の窪地を東の船窪、大露頭北の西の船窪などの窪地は、船窪峯の山頂にある窪地として呼ばれたのは後世の事のようにである。

### 井桁正宗・銅山正宗の正宗

灘の酒蔵の六代目山邑太左衛門は、天保年間に近くの名水を利用して造った日本酒に仏教の「臨濟正宗」の名に由来して「正宗」と命名した。せいしゅう(正宗)とせいしゅ(清酒)の語呂あわせをしたものでした。その後、「正宗」の名をつけた日本酒が多く出回るようになって、明治17年(1884)には商標登録できない普通名詞になった。

### 加禰古乃別君

武国凝別命の末裔の加禰古乃別君は、加禰＝金属を示し鉾山に関係する名前であると説明されてきたが、所在地が不明であった。西条市飯岡の岡古墳の祭神の説がある。八幡神社の社号石は岡古墳の蓋石との言い伝えがあり、台石は明治29年(1896)に岡古墳から運んできた。これについて、大倉条馬の「伊予路のふみ賀良」の「飯積神社考」この豪族の首長の墓について記されている。

飯積神社旧記に「飯積神社の祭神十城別命は蟹守山の麓に坐せり」とあり、蟹守山は、訛って「かもりやま」と呼び「冠山」の字を当つ。――往時の十城別命の御座所蟹守山の麓とは即ち半田山のことにして、これ飯積神社の旧地なるべく、後世何時か現地櫛津岡に遷したるなりと。果たして然らば蟹森山は「かに森」にして加尼古乃別命を記念とする呼称とすべく、さらにこの地半田山の大古墳は加尼古乃別命墳墓にあらざりしか。又これら古墳群は御村別苗裔の村域にあらざりしか。因みにいう、半田山古墳群は同地開墾のために破壊されて今はその影を残さず。(半田山は現在の西条ICの箇所。)

野田の岡古墳の主の加尼古乃別命について、大倉は「伊曾乃神社」の「和氣系譜」の中で、十城別命は御村別氏の第三世(孫)、加尼古別命は第四世(曾孫)と書いている。

## 別子鉦山史の留意点—追加5

令和4年6月5日 坪井利一郎

### 自彊舎の教育方針

鷲尾勘解治は、「私が自彊舎を創立してその教えの根本を何に求めようかと考えた時、仏教と儒教—孔子の教え—とでは道に入る行き方が違う。仏教は悟りを得て下化衆生を行うが、孔子の道は下学而上達するというように日々の行いを忠信を主として行くと、自然に天の道に通ずることができる、と説かれている。それで私は自彊舎では孔子の道を中心にするようにきめた。」(片山修「師と友と・・・」の中のP7「鷲尾先生訪問記」)

小乗仏教では、仏陀の境界は凡夫の到底及ばぬ処で、凡夫は仏陀の教えを聞いて修行に努め、解脱を得て阿羅漢になるのが最高の限界であった。消極的静寂主義。大乘仏教は、何人と雖も志を立てて仏陀の教えに従って如実に実践すれば仏陀になりうるという釈迦仏陀の教えに基づき、各自が仏陀になることを理想として、世間、出世間に涉って衆生を救済すべきであるという立場をとった。しかし、仏陀の超人性、絶対性を強調したので、仏陀たることは最高の理想であるが、到達することは困難とせざるを得ず、そこで仏陀の候補者として菩薩となって自身に正覚を求めるとともにすべての衆生を救済すること、上求菩薩、下化衆生に主眼点を置くようになった。菩薩主義。自利(上求菩薩)、利他(下化衆生)の二行の菩薩行を掲げる大乘は、小乗の自利行と対照的である。

鷲尾は、仏教は自らが悟った後に衆生を救済すると解釈しているが、大乘仏教では、自らが悟ると衆生を救済するのは同時におこなう立場である。

### 自利利他公私一如

これは、「住友の事業は、住友自身を利するとともに国家も利し、社会を利するほどの事業でなければならない。」というものである。仏教用語で、「自己の仏道修行により得た功德を自分が受け取るとともに、他のためにも仏法の利益をはかる」という意味である。悟りを開き如来に成れるにもかかわらず、この世にとどまり衆生を救わんと誓いを立てるとともに、己もなお修行に励む菩薩行である。観音菩薩、地藏菩薩、普賢菩薩、勢至菩薩、弥勒菩薩など。

初代総理事・広瀬幸平は、別子銅山の近代化を推進した。当時、自分たちが儲けるだけでなく国民と利を分かち合うとして、新居浜製錬所を開設し、地域が工業都市として発展する基礎を築いた。

第2代総理事・伊庭貞剛も、「住友の事業は住友自身を利するとともに、国家を利し、且つ社会を利する底の事業」という方針を執った。

第3代総理事・鈴木馬左也も、「徳を先にし、利を後にする。徳によって利を得る。」という自説を語っている。

新居浜事業所の支配人・鷲尾勘解治は、別子銅山の鉦量が後17年分しかないことが判明したとき、地方後策を提唱、実践して今の工都・新居浜の原型を作った。



## 別子鉦山史の留意点—追加6

令和5年4月16日 坪井利一郎

### 坂

俳句の言葉に「海坂」がある。小高い所に上ったときに、海が坂のように見えるのを表現するのに使われる。語源は「海境<sup>うなさか</sup>」なる古語である。「海神の国とこの国とを隔てる境界。海の果て。」坂=境である。四阪島=四境島、四つの坂がある島ではなく、四つの(エリアの)境にある島である。

### 鉦児の昭和史(谷口光夫)から

#### お不動さん祭

喜三谷集落の入り口で石段を5段上がると、幅1間、奥行き1間の岩屋があって不動明王が安置されていた。お祭りは7月の日曜日。祭りの当日は、青地に白字で大山不動明王と喜三谷氏子中と染め抜かれた幟が2本、集落の入り口の道に立てられた。祭りの午後には、青年・子供相撲が執り行われた。(喜三谷の不動明王は、元は旧別子の縁起の端の大山積神社の西下に鎮座していた。喜三谷集落の撤退で、別子ライン入り口に移転した。火災にあって現在は四国中央市土居町北野に鎮座している。大山不動明王と呼ばれる「大山」は、神仏習合で大山積神社のところの不動さんが考えられる。小女川と足谷川・喜三谷に挟まれた長尾は、一の森、二の森、三の森に続いて大山があり、西山に続く。喜三谷に移り、不動さんの上に聳える頂を大山としたか。)

#### 運動会

東平小学校では、大運動会と小運動会が年に2回開催された。大運動会は全校生徒が紅白に分かれて、得点競技の種目と遊戯や体操等の得点競技でない種目を実施した。高学年で吹奏楽隊を編成した。ドラム、小太鼓、トランペット、ホルネット、トロンボーン、クラリネット等の十数名の編成隊は運動会の華だった。小運動会は、大運動会から1ヶ月遅れて開催された。東平が赤・黄・緑に分かれて対抗競技が行われた。ほとんどが児童の自主運営であった。ちなみに、黄組は尾端・喜三谷・第三・日浦・川又の連合軍であった。(赤組と緑組の連合軍の編成はわからない。小学校の東西で分けていたか?)

### 大鉦の六角棒

大鉦の鉦石の上に載せている六角棒は、清浄な亀甲の六角形に成型したハンドル機能のものだと思っていた。どうも、六角形に成型した坑木ではないのか。旧別子の鉄管橋の所に置かれているものである。歓喜間歩の「四ツ留と祭神」の図に見る六角形の「矢」である。鉦型の鉦石と矢を藁縄で7・5・3に巻くのは、清浄な注連縄で邪気からの結界。鉦床と坑道の清浄保持。地鎮祭に見る結界縄と同じである。だから、鉦石を成型しない時には、注連縄を巻いていた。京都祇園祭りの鉦は、今も藁縄で結束している。

## 螺灯の鯨油

別子銅山絵図や鼓銅図録に坑夫がサザエの壺に鯨油を満たして明かりとしている。アメリカの街灯では、マッコウ鯨の頭部に溜まる油を燃やすと明るいので、燃料に用いた。石油が掘られる前の油は鯨に求めていたので、日本沿岸まで捕鯨に来た。これが契機となって鎖国が解かれることとなった。

螺灯の鯨油も明るく燃焼するマッコウ鯨の鯨油だと思っていたが、日本では肉のうまいヒゲ鯨類を取っていたので、齒鯨のマッコ鯨ではない。鯨取りの図に描かれているのはヒゲ鯨である。鯨は解体されて、肉、ヒゲ、皮、骨、血、内臓と全部を利用した。螺灯の燃料には高価な菜種油を使わず、油煙も多く、臭い鯨油を多量に使用した。新居浜市教育委員会「近世新居浜三百年史―資料」には、鯨や鰯の油を使用しているとあるので安価な油である。近海捕鯨が、別子銅山の照明を鯨油の供給で支えていた。

新居浜市教育委員会「古文書で探る―ふるさと新居浜」には、別子銅山入用の鯨油について、近江屋が別子銅山の新居浜御役所宛てに出した、仕切り書に記されている。

(参考文献：近藤日出男「何をたべてきたのだろう」高知新聞社)

## キゲタ正宗＝鬼殺し

酒に銘をつけて売ようになったのは、元禄時代の上から始まった。「剣菱」「男山」と出て「正宗」が続いて現れる。この「セイシュウ」が清酒の語源だといわれている。キゲタ正宗は、住友が造った清酒となる。

別名の「鬼殺し」は、大江山の酒呑童子の御伽草子に出てくる「神の方便鬼の毒酒」などが元になっているのではないか。大江山の酒呑童子が、都の御姫様をさらっていったので、源頼光らは男山八幡宮、住吉明神、熊野権現に祈願してから鬼退治に出かけた。山中で出会った三老人からももらった「神の方便鬼の毒酒」という、人間が飲めば力が増すが、鬼が飲めば神通力が無くなるという不思議な酒を鬼に飲ませて、酔いつぶれたところを見計らって退治した。キゲタ正宗を飲むと、鬼のような荒衆あらしこの坑夫も酔いつぶれておとなしくなるので、「鬼殺し」の異名がついた。

「前太平記」には、大江山から逃れた酒呑童子の眷属を、源頼光が伊吹山で追討する。伊吹山の奥に大江山があるとも考えられ、東山道の飛騨や信濃に「鬼殺し」の銘酒が誕生したのではないか。京から見ると、伊吹山、東山道は東北の鬼門に当たる。

## 郷土料理イズミヤ

新居浜の郷土料理として、コノシロの姿寿司で、酢飯の代わりにオカラに具を入れたのを別子銅山の坑夫が食べたので、主家の屋号からイズミヤと呼んだと書かれているが、松山地方にもイズミヤの名で同じ寿司ある。健康志向でこの頃出てきた寿司で、一般には食べられていない。別子銅山では、幕府から安請米が確保されている。土佐中村では、オカラを具に昆布で巻いた寿司がある。

## 横たえた梯子をまたがない

雑誌「遠鳴」の「昔話」の中に出て来る。留意点一追加3で述べたが、再度述べる。

漢字の『「降」コウ、くだる、ふる 「陟」チョウ、のぼる、すすむ、たかい』の偏の「阝」は、天上の神が昇降する際の階段、梯子を示している。「降」は、神が階段、梯子を歩いて降りてくる意味の漢字である。神が神梯を降ることを降という。「陟」は、神が階段、梯子を歩いて登っていく意味の漢字である。伊勢神宮の真ん中の柱に足掛けの刻みがあり、これは神が昇降する階段・梯子と考えられている。

梯子をまたがないのは、梯子が神の昇降の器具であるから、神聖なる器具はまたげないのである。 (小山鉄郎「白川静さんに学ぶ・漢字はたのしい」新潮文庫)

古代中国人の認識では、天と地の間には目に見えない階段がかかっている、神様はその階段を歩いて天と地上を行き来していたと考えていた。コザトヘン「阝」が階段である。「降」は神様が階段を歩いておろしてくることを表す。階段を歩いて天に帰るのを「陟」で表す。

(阿辻哲次「漢字再入門」中公新書)

別子銅山図巻の第四図・採掘図で丸太に足掛けの刻みをつけた階段・梯子が描かれている。坑夫にとって、採鉱に使う石頭、鑿や梯子などの道具や用具は神聖なものである。職人は自分たちが使う道具や用具を神聖視する。石工は毎日鑿の焼き入れをして使用しているので、12月にはふいご祭りをを行い、鑿に感謝する。農家は正月の仕初めに鍬を田圃に置いて祭り、豊作を予祝する。

坑夫にとって梯子は神聖な用具であるからまたげない。闇の坑内の昇降に使用する梯子は、便利な用具であるのみならず、命綱同様の用具でもある。石見銀山の久保間歩を見学した時、坑道から堅穴上部の切り刃に渡した丸太を見た。その時に、足元注意を促された。足元には堅穴の延長が下の水平坑道まで底なし井戸の如く口を開けていた。一歩間違えたら奈落の底である。懐中電灯の投光で堅穴全体が見渡せたが、螺灯の明かりでは心もとない。

「日本百低山」というテレビ番組で、沖縄県の名護岳(標高345m)に登山するのを観ていた。高知県出身のホストの男性が、「こんなところに祠がある」と近づいて行ったが、ゲスト出演していた地元出身の女性タレントは、祠のかなり前で突然立ち止まってしまった。「聖域だから行けない。」と語っていた。禁忌の意識があるとできないのである。

## 東延・南口のインクライン

東平、星越、四阪島のインクラインは、地図や図面等で知られているが、旧別子時代になると地図に表れてこないで認識されていない。新居浜観光協会刊行の「別子銅山」のP205に、「明治30年代の別子東延自動機械」の表題で掲載されている。第一通洞南口と東延間に設置され、東延から南口へは鉱石を、南口から東延へは石炭が輸送されていた。

東延——南口——北口——石ヶ山丈——端出場——惣開  
インクライン 馬車鉄道 上部鉄道 策動 下部鉄道

## 別子鉱山史の留意点－追加7

令和5年11月19日 坪井利一郎

### 帯木には免振機能もあった

「別子銅山の写真を読む」02. 勘場(明治14年)の中で、「重任局の中心部が乗っている石積みでは、階段下の張盤の左部と医館・縄倉庫の右奥部に木材を挟んで石を積んでいる。狭い谷間で垂直に石を積むための鎌掛け積みの**帯木**である。」と説明した。帯木には、地震による揺れを緩和する機能も備わっていたと考えられる。上田篤「橋と日本人」(岩波新書)に、諫早市の眼鏡橋を解体すると、基礎には地震の揺れを緩和するために石の下に枕木が並べられていた。」とある。

### 連濁

一般的に、連結した語の熟度が高いと(二語が一語と感じる度合いが高いと)連濁は生じやすくなる。地名のように慣れ親しんだ固有名詞は、特に橋名では連濁が起きやすい。共存橋、共栄橋を「きょうぞんばし」「きよええいばし」と呼ぶように。日本の橋の中には「川の水が清く濁らないようにとの願い」から、あえて濁音にせず清音にするケースがある。住友新道の「上の橋」「中の橋」「下の橋」は清音で呼ぶ。

(参考文献: 原島広至「大阪今昔散歩」中経文庫)

## 大露頭 赭くてそこは 雪積まず

令和4年6月5日 坪井利一郎

昭和32年2月14日、山口誓子は高弟の橋本多佳子とともに招聘されて、住友クラブにおいて「俳句と和歌について」の題目で講演し、講演後に句会を開いていた。

翌日、多佳子は四阪島に行き、誓子は旧別子を見学し、夜には東平で句会を開いた。旧別子見学を詠んだ42句は、天狼の3月号に「別子銅山」の題で掲載された。

### ※天狼:全天でいちばん明るく輝く恒星のシリウス。

旧別子で詠んだ「大露頭 赭くてそこは 雪積まず」の句碑の除幕式は、昭和34年5月15日に、東平修理工場前で執り行われた。その席で「山頂一面の積雪の中に唯一ヶ所雪の積まない処を発見した感動を詠んだ句である。270年間連綿として今なお尽きぬ別子銅山の生命力を象徴するもの、営々と繁栄する住友事業の今日をなした根拠は、この雪の積もらぬ大露頭である。自然の雪も銅山峰の奥深くこんこんと尽きることのない神秘的な精気の前に、自ずからとけるのではないだろうか。」と解説された。

また、「誓子句碑アルバム」の解説では「四国の別子銅山で、発掘のはじまったのは旧別子である。そのあたりに赭い露頭があったので、別子の山に銅の埋蔵されてゐることがわかったのだ。雪の中を私はそこへ行ったとき、その赭い露頭には雪が積もっていなかった。そこだけ雪のない露頭を見た私は、直ちに銅山の銅気を感じ、その銅気が雪を積もらせないのだと思った。」と語っている。

この句碑は、昭和43年3月の東平坑休止に伴い、同月に西原町の鉦山本館前に移設された。

2月15日、誓子は7時10分頃に泉寿亭を出発して、7時35分頃に端出場に着き、三交代の朝組の8時の坑内電車に乗車し、大立坑、上部立坑を経て、第一通洞南口に出られたと思われる。なお、上部立坑捲揚機は東平坑休止の昭和43年4月で運転を終えた。厳冬期なので日浦登山口から銅山峰への登山は考えられない。まして、肺病を患い住友を辞した誓子が、日浦登山口からの雪中登山は無理である。住友関係者は12月～3月の冬季は、旧別子へは入らない。

この5月15日に135回目の旧別子・銅山峰登山をし、別子銅山遺跡群を案内した。端出場に8時に集合。日浦登山口から登山して下山したのが16時30分だった。

愛媛大学の青木・准教授は、雑誌等に誓子が端出場をスタートして、籠電車に乗って日浦から登山したと寄稿している。時間経過を推計すると、9:00 日浦、9:30 日浦登山口、12:30～13:00 銅山峰、15:30 日浦登山口、16:00 日浦、16:30 東平。2月15日の東平はとっぷりと暮れている。また、句の解釈で、快盛法印が物住頭に魔物を封じた話を前置きして、山中

の気配を読み取ろうとしている。しかし、物住頭を「ものずみがしら」と読んでいるが、正しくは「ものずみのあたま」である。命名者は銅山峰ヒュッテの主人であった伊藤玉男である。江戸の昔の話ではない。42句の中に、日浦から第一通洞南口までを詠んだ句は無い。

徒歩の道順に句を詠んだとなると、第一通洞、銅山越え、銅山峰、大露頭、歓喜坑の順番で歓喜坑が後回しになると、第一通洞は北口から登山開始したと捉えられる。しかし、そうではなく南口から登山開始したと考えるのは、①2月の雪中登山では北面は雪が深く急斜面なので雪が少なく緩斜面の南面を登る。②当日は晴れていて冬の天候が変わらないうちに、まずは銅山峰の山頂を目指した。標高差で100m下の日ごもりの歓喜坑は後回しにした。銅山峰の句に、「霞める下界、冬日に照らさるる、日輪、土佐の山」などが詠みこまれているところから、当日は晴天と判定できる。③珈琲党の誓子を銅山峰山頂のロケーション下で、コーヒーでもてなすために先に山頂を目指した。(旧別子・銅山峰登山研修での抹茶接待においても、銅山峰山頂の野点が最高である。山頂の視界がきかない場合は、次善の策として歓喜坑前で野点する) ④第一通洞南口から歓喜坑までは、やや急坂であるが、歓喜坑から銅山越えの牛車道、銅山越えから銅山峰の尾根道は緩やかで、登山の負荷が小さくて済むルートをとっている。⑤銅山越えの前に出てくる「樹氷林輝く」では南面で太陽の光を受けないと輝かない。⑥断面図から判断すると、上部立坑から第一通洞内を通り地表に出るのは南口の方が近い。

別子銅山の42句は、道順に掲載しているので、読んだ場所を推定してみる。

陶器市 朝まだ開かず 霜曝す	山根	
○寒けれど 吾が乗る人車 凭あり	端出場	乗車前
坑走る 寒き人車に 頭を低め	第四通洞	坑夫と一緒に入坑
ここに隘り 寒巖の 坑走る	第三通洞	寒巖で端出場より寒い
通洞の 岩壁ここまで 外の寒さ	第一通洞南口	通洞はここまで
○雪登山 靴坑内を 通らし貰うふ	第一通洞	「靴」で坑内を徒歩
雪積める 坑口青く 暗き光	第一通洞南口	
◎坑外の 焚火は高き 火を蔵す	第一通洞南口	
○焚火真近かに 高山の 雪の凝り	第一通洞南口	
○帽阿弥陀 冠り雪山を 冒洩す		
○雪の径 吾につづきて みな黙す	木方	急登坂となる
○聞こゆるは 雪山登る 衣 摺れのみ	木方	
氷雪に 氷砂糖を 口含む	牛車道	口に運べる緩やかな道
樹氷林 輝くところ しばし過ぐ	牛車道	尾根近くの風道あたり
ひかげのかづら 首に纏く 晩年も	牛車道	
○雪を硬くす 山頂は 非常に	銅山越え	尾根に出る
○ここ行きて 倒れし人に 雪供養	銅山越え・峰地藏	

○銅色に 霞める下界 　そこより来し	銅山峰	
大銅山 　らしく冬日に 　照らさるる	銅山峰	
冬日輪 　懸る銅山 　風化して	銅山峰	太陽が南中
岩山の 　瘦落葉松に 　霧氷与え	銅山峰	
雪の裏 　明日は吾が行く 　土佐の山	銅山峰	
雪の頂上 　紙のコップに 　熱珈琲	銅山峰	
雪嶺に 　憩ひて吾は 　珈琲党	銅山峰	
雪の頂上 　少年は 　憩はで過ぐ	銅山峰	
岩山に 　凍てよウイスキー 　棄小瓶	銅山峰	
○慎みて 　踏む銅山の 　顛頂の雪	銅山峰	※顛頂:てっぺん
○大露頭 　楮くてそこは 　雪積まず	大露頭	※楮:焼き尽くす
○雪中に 　埋もれて遺る 　歓喜坑	歓喜坑	
雪銅山 　間歩と呼びし 　語も廃る	歓喜坑	
◎此方彼方に 　廃坑が 　白息衝く	歓喜坑・歓東坑	
◎ここも廃坑 　谷間に 　白息衝く	歓喜坑	
○廃坑を 　鎖せる氷柱 　薙ぎ払ふ	歓坑内	
○雪に冷え 　来て廃坑に 　入り憩ふ	歓喜坑	
○雪しづか 　廃坑以後の 　しづけさぞ	歓喜坑	
○旧熔爐 　ありし朱谷 　雪積もる	木方・上の床屋	
深谷に 　獵夫立つ陰 　落ちみたる	木方	
○雪の樋を 　毒の坑内 　水走る	第一通洞南口	
○寒き坑車 　吾と坑夫と 　凭あふ	第三通洞・籠電車	
○坑車より 　雪に飛び降る 　若き鉦夫	東平・第三	途中下車
闇に雪 　けふの最後の 　坑車帰る	東平	
○鉦山の 　寒暁汽笛の 　余喘絶え	東平	※寒暁:明らかに寒い、寒々しい

なお、○印及び◎印の句は、句集・方位に「別子銅山」と題して掲載された22句である。ただし◎印の3句は掲載時に直しているのので、次に示しておく。

坑外の 焚火は高き 火を蔵す → 坑外の 焚火は長き 火を立たす  
此方彼方に 廃坑が 白息衝く → 廃坑が おのづと白き 息を衝く  
ここも廃坑 谷間に 白息衝く → 廃坑が おのづと白き 息を衝く

陶器市 朝まだ開かず 霜曝す	山根
○寒けれど 吾が乗る人車 尻あり	端出場
坑走る 寒き人車に 頭を低め	第四通洞
ここに隘り 寒巖の 坑走る	第三通洞
通洞の 岩壁ここまで 外の寒さ	
○雪登山 靴坑内を 通らし貰うふ	
雪積める 坑口青く 暗き光	
◎坑外の 焚火は高き 火を蔵す	
○焚火真近かに 高山の 雪の凝り	
○帽阿弥陀 冠り雪山を 冒洩す	
○雪の径 吾につづきて みな黙す	
○聞こゆるは 雪山登る 衣摺れのみ	
氷雪に 氷砂糖を 口含む	
ひかげのかづら 首に纏く 晩年も	
○雪を硬くす 山頂は 非常に	
○ここ行きて 倒れし人に 雪供養	
○銅色に 霞める下界 そこより来し	
大銅山 らしく冬日に 照らさるる	
冬日輪 懸る銅山 風化して	
岩山の 瘦落葉松に 霧氷与え	
雪の裏 明日は吾が行く 土佐の山	
雪の頂上 紙のコップに 熱珈琲	
雪嶺に 憩ひて吾は 珈琲党	
雪の頂上 少年は 憩はで過ぐ	
岩山に 凍てよウイスキー 棄小瓶	
○慎みて 踏む銅山の 願頂の雪	
○大露頭 繕くてそこは 雪積まず	
○雪中に 埋もれて遣る 歓喜坑	
雪銅山 間歩と呼びし 語も廃る	
◎此方彼方に 廃坑が 白息衝く	
◎ここも廃坑 谷間に 白息衝く	
○廃坑を 鎖せる氷柱 薙ぎ払ふ	
○雪に冷え 来て廃坑に 入り憩ふ	
○雪しづか 廃坑以後の しずけさぞ	



- 旧熔爐 <sup>あけたに</sup>あり朱谷 雪積もる  
 深谷に 獵夫立つ陰 落ちるたる
- 雪の樋を <sup>ひ</sup> 毒の坑内 水走る
- 寒き坑車 吾と坑夫と <sup>もたれ</sup> 凭あふ 第三通洞
- 坑車より 雪に飛び降る 若き鉦夫 東平
- 闇に雪 けふの最後の 坑車帰る 東平
- 鉦山の 寒暁 <sup>よえ</sup>汽笛の <sup>よせん</sup>余喘絶え 東平

なお、○印及び◎印の句は、句集・方位に「別子銅山」と題して掲載された22句である。ただし◎印の3句は掲載時に直しているのので、次に示しておく。

坑外の 焚火は高き 火を蔵す → 坑外の 焚火は長き 火を立たす  
 此方彼方に 廃坑が 白息衝く → 廃坑が おのづと白き 息を衝く  
 ここも廃坑 谷間に 白息衝く → 廃坑が おのづと白き 息を衝く